

【翻 訳】

テ イ モ レ オ ン  
ハーマン・メルヴィル作

大 島 由起子 訳

I

年代記が告げしごとくに、この世では、  
利己主義の最たる者が  
罪すら感じず人を殺め、掟を破り、  
軍刀の柄で強奪品を砕けども  
法の裁きを受けるは稀なり。  
国を愛する善人は  
掟破りに及ぶべきか  
それとも、ひ弱き善など、すくんでおるが賢きか。  
善は検閲見下し、そして禁じる  
善人は、あえて度胸で、  
徳高き者をあきれさせてはならぬのか—  
成功者を見れば神のご意思を感じられようか。  
恐怖が  
この世ならぬ徳を惹き起こし  
束縛をもろともせぬ行動に駆り立てたのだ—  
かの常軌を逸せし超越は認められるべきや。  
ならば、その者が蒼白くも失墜し  
なおもて栄光を勝ち取るのを待つならば  
そは摂理ゆえぞ、偶然ぞ。  
いずれであるかをティモレオン、そなたが証してくれた  
のか。

II

アルゴスとクレオンが  
自由国家コリントが掲げし理想と権利を脅かし、  
兄弟は戦地に赴きし。  
一人は歩兵、いま一人は馬上の騎士として。  
持ち場、持ち場で、勇しく戦えど、  
功名にはやる騎士殿は  
一人で突っ込み、さっさとやられ、

人馬共に傷つき、騎士殿は落馬せし。

ティモレオンは阿鼻叫喚その中を  
兄を救げに馳せ参じ、  
自らを盾として  
矢など抜き取り、孤軍奮闘。  
ところが、フェイディアスはさしもの心も挫け、顔面蒼  
白  
一旦は死も覚悟せど  
兄を守る  
傍らでは輩が次々やられ、敵は力を盛り返す。

ここで眠ることになるやもしれぬ、ここでよい、もう  
眠りたいと願っては、  
眠れかし、さすればフェイディアスの姿がとどまろう  
と、観念す。  
されどなお、人生とは止まることを知らぬもの、続けて  
いかねばならぬもの、  
傷受けて汚されようとも続くものだ。

そうとも、人生は続く。そして蜂蜜酒も人も  
潜伏していた菌を発酵させる、  
二人はかつて共に遊びし兄弟なれど  
かけ離れた大人になった。

III

兄ティモファネス\*は母の誇り—  
母の誇り、母のベット、母の全てだった  
ティモレオンは母の目に映らず。

(しかも母や思った) わたくしがティモレオンを誇るな  
んてできっこないわ

わたくしの可愛いあの子を救ってくれたらしいけれ  
ど。

でも、救うは義務だったよ、そう、正しき行為だったのよ。  
部下としてすべきことをした、ただそれだけのこと、  
と感謝知らない。

二人が少年の頃、わたくしはティモファネスの肩を  
もったわ、  
弟には分をわきまえさせ  
兄を助け、兄を愛させた、

兄を慰めること、それだけがあの子の取得。  
でも、わたくしは弱者に仕えるなんて嫌、  
ティモレオンはだめ、冴えなくて  
この母を  
人も羨む権力を持つ、女王にはしてくれない。  
でも、かわいいお前、わたくしが最初に生みしそちこそは  
性別こそ違え、わが生まれ変わり。  
男ならばわたくしがなりし者。  
勇敢なわたくしのティモファネス。  
世の栄光を得るのはそちだわ、  
良かれと思えばこそ、切羽詰まって意を決して、ああしたの  
しかも見事やってのけたわ。  
母の勘こそ正しいわ。  
ひるまずに言うてのけるわ、  
忠臣どもを殺めたわ  
愛しきあの子が権力の座に登りつめ、治るため—王子になるためよ。  
(\* 366 B.C. に暴君となる)

#### IV

公正さを重んじる  
ティモレオンは憎しみに苛まれた  
高慢で人を餌食にする  
成り上がりの傍若無人ぶりに。  
ティモレオンはコリントを愛した、  
オールド・スコティアの長が氏族を愛したごとくに、  
最近兄を救ったごとき  
忠義心も持ち合わせていた。  
だが親族の罪により—恐怖に陥れられし町、  
口を閉ざした従順な母—  
忠孝したくともうんざりで、  
孝行息子、真の愛国者、真の弟の。  
不吉にもティモレオンは夜、  
神々のリクトルを幻視する。  
義の大公使たる神々は  
<激怒>に脅されし様子なり。  
さはあれど、ティモレオンはひるまず行動せし  
<衝動>に駆られていようと肝を据え。  
ティモレオンは命令に従う、というよりも  
有無をいわせぬかの声、天声をば耳にしたと思った。

#### V

穏やかかつ  
慎重に歩を進め  
正しき者が歩み寄る

激昂しておろうと丁重に。  
ティモレオンは兄を探した—一人で、  
そして嘆願す。取り合われず笑われる、  
するとティモレオン、今度はあと二人と共に、  
かの暴君にさんざん嘆願する。  
陽気だったのに怒りだしたのはいずれか。  
「行け」と足踏み鳴らし、「説教する気か。  
お前のいう通り、俺は間違っている、いいか、それでも  
力にまかせて治めるぞ 手加減なしだ」。  
無口な弟は蒼くなり気が塞ぐ、  
こそこそと脇に退くはいずれなり、  
ティモレオンは啜り泣き、決断し、暗殺を許可せし、  
コリントに<正しき>が回復す。  
(\* 次連との間に、兄の供の二人—アイスキュロスと占者—とにより兄である將軍殺しが行われている。)

#### VI

それにしてもああ、ローブに付きしは誰が血ぞ。  
民はいずれの卑怯者から目を背ける、  
母の禁止が重く  
道化が陰気に嘲る。  
口さがなき世間の、  
無責任な中傷が力もち  
事を捻じ曲げ  
兄弟殺しを言い立てて続ける。  
時あたかもプラトン時代。光彷徨い  
無神論の永続を確信さす。  
<徳>は制裁力失くし  
道徳も無視されるだけ。  
心配げだった。  
裏切られるまで良心毒し  
混乱していないときに運命が権威を与えた  
取り返しのつかぬ運命を恐れる。  
そこにおわすは、動顛せしティモレオン  
海悶えて岸辺の海底空にして、  
自然界最後の避難所を晒すがごとくに  
難解さを剥き出しにした。  
ティモレオンは惑う。夜ともなれば、  
黄泉の谷から不吉な声がそそのかしてくる—  
なぜ苦しむのかと。もうこちらにおいて  
人間のことなど感じないフォキオンのようになっておしまいと。  
だが、ティモレオンはかの声に克ち、  
生きること—荒地で暮らすことをば選び取る。  
幾年もの亡命を、  
厳しき幼馴染に密会するだけの辛さをば選び取る。  
たった一度の逸脱ゆえに疎まれて  
いられなくなりし彼、

斬られ

戦場に転がる土気色した頭（こうべ）のごとし。

（\* 死刑のティモレオンは請われて戦うまで、二十年間、田舎に隠遁していた）

## VII

次のうねりは、もっとうんと先であろうと、潮寄せ来たる

忍耐は受難にいつまでも弄ばれはせぬ。

目に見えぬ天球のごとくにティモレオンの思考は巡り

つまらぬ妥協をしたと、天を断罪す。

なぜに第二の大義に訴える

人間同士で話しても詮も無し。

神々よ、方々に我は挑まん、

これは神々との口論なり。

正義の人は方々の司りし世から、永久に隠遁しているべきや。

方々の治め方を責めているのだぞ。

我、方々の大理石像神殿に立ちおりし—

心を石にしておられるがゆえに、お呼びししたとて詮無きか。

さはあれど、オリンパスの神々よ、打ち拉がれしこの我をご容赦あれ。

われが方々を責め

喚こうとも、

白き眉を触りながら、太っ腹で応じて下され。

良心は、疑おうとも、次には信ずる。

教えて下され。一体なぜに、

かつてのようには烈しくなくなっているというのに

実体を伴わぬ、父無き影なる自分は、まだ捨ておかれしままぞ。

そうとも、一体、方々は真に神ぞ。神々ならば、そなたたち

どのような絆を結んでいるか、教えてたもれ。

そなたたちの動揺が誤解されたのだから、捻らずとも、

そなたたちもまた過たれたがゆえに。

さはあれど、ささやかな徴をお示し下され—

そなたたちの静かなる空に低い雷でも轟かせて。

どうかわれを安心させてください、

主人を求めて吠える佗しき野良犬になどしないで下され。

## VIII

人の気分は時と共に移ろいて

気まぐれに世を操りぬ。

コリントはティモレオンを召還する—そうとも、

彼の汚名を雪ぎ、褒め称える。

シシリーの原では激戦続き

ティモレオンが勝利もたらし、和平の虹を架け島に平和を取り戻す。ティモレオンは喝采さる麗しの祖国の解放者、ジュピターの兵士、聖人と。

コリントは淋病患い、悪も正されず。

長きにわたりティモレオン、そなたが正しかった。

そなたはもはや兄殺しではない、

それどころか、国家の救い主、ジュピターの兵士、聖者なり。

故郷の都市がそなたを待ちわび

戻ってくれるよう嘆願す！われらはそなたの扉を飾らんとする月桂樹なりと。

しかしご当人、その島で愛されしご客人は、寛ぎて、

決して暮す岸辺を離れコリントに向いはせぬ。

（完）

\*本研究は科研費（22320058）の助成を受けたものである。

本詩は Herman Melville(1819-1891) の詩集 *Timoleon* (1891) 所収。底本は Herman Melville, "Timoleon." Ed. Douglas Robillard. *The Poems of Herman Melville*. Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2000. 305-10. 訳中の括弧の中で\*で示したものは訳者注。

